

トイレの便座がないことから 人は学べる

沖縄県立八重山高等学校 3年 清水 菜々子

「うおっ、マジか！」タイに行き、農村のホームステイ先で初めてカルチャーショックを受けた。なんと、風呂は蛇口にホースがつながっているだけ、トイレは水洗トイレではなく、便座もなし。もちろん、トイレットペーパーもない。さあ、残りの二日間どう過ごそう。私は、覚悟を決めた。ヒィヒィ言いながら水風呂に入り、空気イス状態で用を足す秘技を身につけたのであった。最初は不便に感じていたが、不思議と慣れてきた。ホームステイ先を後にする頃には、水風呂が気持ちいいとさえ思うようになった。

もう一つ衝撃を受けたことがある。それは、ホームステイ先の子どもと遊んでいた時のことである。携帯の翻訳アプリを使って会話しようと試みたのだが、その子は、日本だと小学五年生であるのに、タイ語を読むことができなかった。ホームステイをした後に行ったバンコク郊外の、高級住宅街の中にある学校では、低学年でタイ語をスラスラと読んでいたのに。そこで、初めて教育格差というものを実感した。しかし、私が衝撃を受けたどちらのことも、現地の人には当たり前のことであった。風呂やトイレは、体を流して、用を足すことができればいい。タイ語が読めなくてもその子は話すことができる。だから、特段困っている様子はなかったし、言ってしまうと、どうにでもなるのである。

その現状を見て、私は悩んだ。なぜなら、タイに来た目的は、発展途上国の課題を見つけ、自分にどんなことができるか考える事であったからだ。将来は、貧困によって教育を受けられない子どもの支援をし、教育の機会均等化から経済格差をなくしたいと考えていた。しか

し、ホームステイ先は、豊かでなくても、タイ語が読めなくても、幸せに暮らすことができる。これでは、私が将来したいと思っていたことは、必要なことではなくて、先進国の押し付けに過ぎない。

すごくモヤモヤしながら迎えた、タイでの研修の最終日。この日はバンコク最大のスラム街である、クロントイ・スラムでスラムの子ども達を支援する施設を訪れた。そこでは、スラム街に住む子どもたちに向けて、図書館を開設し、読書を通じて知識を補うとともにコミュニティとしての役割も果たしていた。迷いがあった私は、そこで働く日本人の方に、貧しい子供たちに教育支援を行う意義を聞いてみた。すると、十分に勉強してこなかった子どもたちは低賃金の労働で生活することを余儀なくされる。そして、生活の安全が失われ、簡単にお金を稼げる薬物販売などの違法な職業に就く可能性が強くなると共に、犯罪を起こす可能性も高くなると言っていた。

「ああ、確かに。今はタイ語が読めなくても、勉強ができなくても、困っていないけれども、将来を見ると子どもの選択肢を狭めてしまうことになり、結果的に貧しい生活から抜け出せなくなるのだな」子どもたちが、危険な仕事に巻き込まれないようにするためには、それを避ける十分な知識をつけることが大切だと感じた。なんとなく、教育支援を行う必要性が分かったような気がする。

タイに行って、日本で当たり前だと思っていたことが、覆され、良かれと思っていたことが、独りよがりな考えであるかもしれないということに気付いた。また、教育支援を行う意義は分かったが、勉強する意味が分からない子には、教育の機会が与えられたとしても意味がないし、かといって、そこで勉強することを放棄させてしまえば、将来の可能性を狭めてしまうといった、矛盾が生じることも分かった。

これらの課題をすぐにどうにかできるかと言われても今の私には、何も思いつかない。

ただ、学ぶことはできる。トイレの便座がないことから。これから、大学に進学する予定だが、このことを念頭に置いて、大学で、貧困や教育支援について学んでいきたい。できることを一つ一つ積み重ねていこうと思う。